

第1章 国内における道路橋床版の維持管理の現状

我が国の道路橋のうち、高速道路や国道に関してはその維持管理に対するの予算措置がなされており、床版だけではなく、桁や支承の橋梁構造に対して点検、診断、補修、更新がなされ、円滑な交通が確保されている。床版はそのなかでも損傷を受けやすい部位であり、点検結果や適切な診断に基づいて、補修あるいは更新が適宜なされている。また、政令指定都市においても独自の予算措置が取れることから、橋梁の維持に対してそれなりの対応が取られており、主要幹線道路と同様、大都市の橋梁に対しては、今後も継続してその維持管理が行われるものと考えられる。

一方、県道および市町村道（以下「地方道」という）の橋梁は、我が国では大きな割合を占めており、図-1.1 に示すように高速道路および国道の橋梁数は、橋梁全体から見るとごく一部であることが分かる。図-1.2 にそれらの割合を示すが、地方道の割合が極めて大きいことが分かる。特に、市町村道の割合は、実に75%にも及ぶ。これらを管理する地方自治体であるが、大都市を抱える都道府県や政令指定都市等を除けば、道路の維持管理に過去、十分な予算を確保出来なかったこともあり、橋梁に対する維持管理は緒に就いたばかりであり、点検・診断という最低限の管理も始まったばかりという状況のようである。少子高齢化、人口減少の波をまともに受け、インフラの維持、更新どころではなく、将来的な存続さえ危ういと評価される地方自治体も少なくない。ここでは点検・診断の結果に応じた適切な補修や更新について十分な対応ができない地方道の橋梁を対象に話しを進めることとする。

上述のような地方道の橋梁では、予算不足で補修や更新が後手にまわり、損傷床版を補修するのに十分な予算が計上できず、その間、損傷の程度が進展したり、補修すべき範囲が拡大し、必要な補修費用が膨らむことになる。また、不十分な予算での施工による再劣化も生じ、ますます対応が難しい事態が進行している状態と考えられる。このような中で、道路橋示方書に従えば供用中の橋梁に防水層を設けなくてはならず、さらなる予算の計上が必要となる。



図-1.1 日本の建設年度別の橋梁数

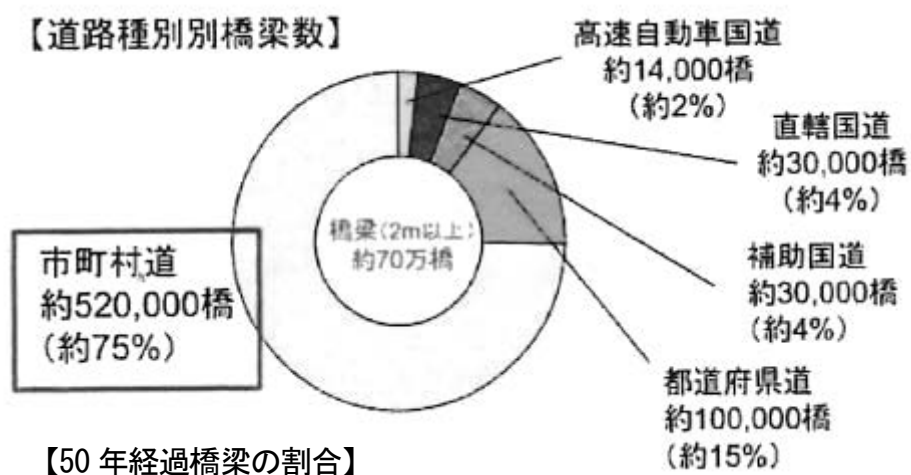


図-1.2 道路種別別橋梁数

地方道の多くは安価な防水層の採用を行い、地場の施工業者による慣れない施工となるケースが多く、結果として十分な防水効果を持つ床版となっているのかどうか疑わしいと言わざるを得ない。また、仮に防水効果が持続していても、この防水層は舗装基層の寿命に伴い、20年ほどで再施工の必要がある。防水層も含めて、再舗装を行わねばならないのである。耐久性のある舗装がより重要と考えられる。